

でも、患者さんにいきなり「予防しましょう」と言っても伝わりませんよね。そこで最初に必要になるのが、患者さんのリスクを一緒にみることです。

患者さんの教育は だ液検査から始まる

来院する患者さんは、メインテナンスに通う習慣がなかったり、セルフケアもぜんぜんできていなかったりする方がほとんど。そこで当院では、初診時に患者さんが何を求めているのかをお聞きします。すると、「むし歯になりたくない」とか「生涯、健康な歯を守りたい」などと思っていることがわかります。

「歯の原因と向き合ってくれた」「あなたのおかげでセルフケアが向上した」などの言葉をもらうようになっています。歯科衛生士にとって、一番のバリューは患者さんからの承認。それを、だ液検査を使ったカリエスマネジメントによって得られているのですね。

逆に、患者さんが僕らの予防の提案を受け入れなかったり、セルフケアになんの変化もなかったりしたら、歯科衛生士はやりがいを見失ってしまうでしょう。

歯科医師は疾患を治すのが役割。歯科衛生士は、疾患になる前に予防する、あるいは治療後の口

でも、そのやり方を知らない。患者さんには、ただむし歯になったら治すといった知識しかないのですね。だからこそ、「僕たちも患者さんの歯を守っていききたいです。それには、リスクをみるだ液検査が必要です」とお伝えします。ここで患者さんに、「リスクを知らなければ、むし歯にならない環境をつくれなさんだ」という気づきが生まれます。そして「生涯健康で、自分の歯を守る」という患者さんと医院のゴールがマッチングするわけです。

ただ、あくまでもだ液検査は一つの製品で、大事なのはそれを使った診療の導線です。だ液検査により自分のリスクを理解し、歯を守っていくための内発的動

腔内をよりよく維持していくのが役割。チームとして、みんなが自信をもって取り組んでいます。

僕たちは、患者さんに「その瞬間だけの口腔ケア」を提案しているわけではありません。人生の中でしっかりと自分の歯を守っていくという意識づけをします。なぜ、そのセルフケアが必要なのか、なぜメインテナンスに通うのか、その理由をしっかりと伝えていくためにもだ液検査を使っているのです。

「菌が多いですよ」などと唾液中のリスクが見えればいいのですが、見えないですからね。見えな

機が生まれる。そして、か
なった理由がわかるか
どうすればよいかを考
さんは行動を起こす。た
自らフツ化物の歯磨剤や
ツールを使うようになっ
綴もメタルではなくセラ
選択したり。導線を通し
さん教育がなければ、
歯の繰り返しになって
ではないでしょうか。

歯科医師と歯科衛生士 それぞれが役割を担う

だ液検査をするように
当院で働く歯科衛生士の
もすごく上がりました。
ば、患者さんから「だ液検

いものをだ液検査によつて
し、患者さんに理解・共
いただく。そうすること
さんのみならず私たち医
幸せを感じられています。

「デントカルト」

についての詳細は、

デントカルト